



編さん便り

関東大震災から 100 年.....	1-3
2023 年度後期千葉市史主催講座のご案内.....	4

Chiba-shishi News Letter NO.31 2023.9

関東大震災から 100 年

市史研究員 笹川 知美

関東大震災の発生から今年でちょうど 100 年目になります。本号では、その被害状況や復興、義捐金についてまとめてみました。

地震発生

大正 12 年(1923)9 月 1 日土曜日午前 11 時 58 分、関東大震災は発生しました。震源地は相模湾北西部で、震源の深さは 25km と推定されています。地震の規模を示すマグニチュード（以下 M と略）は 7.9 とされていましたが、M の概念は昭和 10 年（1935）に考案されたもので、発生当時に観測されたものではありません。この数値は、昭和 27 年に中央気象台が発表したもので、近年改めて再検証が行われた結果、M8.1 ± 0.2 であることが判明しています。

本震に続き大きな余震も起きました。大正 12 年 9 月 8 日の『都新聞』に「大震災の経過」という記事があります。中央気象台技師中村左衛門太郎博士によるもので、9 月 1 日～5 日までの体感じた地震の回数が時間ごとに調べられています。それらの回数を記事からまとめると、9 月 1 日、本震発生から 222 回以上、2 日 323 回、3 日 181 回、4 日 184 回、5 日午後 6 時まで 26 回で、「危険期は既に去る」と記されています。

被害状況

地震を感じた地域は北海道南部から九州北部の広い範囲におよび、特に東京府・神奈川県を中心に関東一円から伊豆半島にかけて甚大な被害が発生しました（被害状況は次頁表 1 を参照）。

被害が拡大した大きな原因には、火災・津波・土砂災害が挙げられます。東京・横浜などの都市部では、昼食準備時刻に地震が起きたため火災が発生、前日の台風の影響によりその被害は拡大しました。この火災

旋風により千葉には紙幣や貯金通帳などが飛来してきたそうです（大正 12 年 10 月 26 日付『東京日日新聞』、以下同紙の引用は日付のみ記載）。『日本歴史災害辞典』によると、船形町（現館山市）では火元は乾物工場 1 か所でしたが、地震で陸地が隆起して井戸水が涸れたうえに、町民が津波を恐れて高台に逃げ、消火する者がいなくなったために、町の 3 分の 1 が焼失しています。また、相模湾から伊豆半島にかけて押し寄せた津波は 5 m 以上に達しました。房総半島南端の相浜（現館山市）では 9.3 m の津波が観測されています。

当時の千葉市域ではどのような被害があったのでしょうか。『千葉市議会史』記述編 1 によれば 9 月 16 日に開かれた関東大震災に関する市会議員の協議会で、神田清治市長は千葉市の被害について、死者 1 名、負傷者 5 名、住家の全壊 2・半壊 5、学校の全壊 2・半壊 2、住家以外の建物の全壊 2・半壊 2、そのほか壁の崩れや屋根瓦が多数落下したことを説明しています。また、千葉駅や千葉県内務部長の要請をうけ、青年団・在郷軍人会の援助による炊出しや避難所・救護所が設置されたと報告しています。

大正 15 年 2 月 28 日に発行された『大正震災志』上巻によると、千葉市の被害世帯数（全世帯数は 7,500）は全潰 6、半潰 20、破損 22 とあり、罹災人口（全人口は 32,700 名）は死者 2 名、行方不明者 4 名、重傷者 5 名、軽傷者 9 名、全焼半焼全潰半潰流失による罹災者 131 名、破損による罹災者 139 名でした。前述の協議会で、神田市長はさらに、救護人員・入院治療をうけた人数を述べ、避難所に入らず市内の縁故などを頼り避難した者は現段階で 3,643 名、避難者の子どもで市の小学校に入学を許可されたものは 149 名と述べています。10 月 4 日付の新聞では避難者の数を千葉市では 2,865 名、千葉郡では 4,309 名であると報じています。『千葉縣千葉郡誌』によれば



写真1 震災直後の県震災本部の執務状況（『千葉市史』近世近代編 355 頁下段）

東京・神奈川からの避難者のために検見川町（稲毛小学校）・幕張町（停車場附近の社寺）・津田沼町（鉄道第二聯隊材料廠）などに収容所が設けられました。避難者を受け入れるだけでなく『千葉市教育史』通史編上巻によれば、千葉医科大学（現千葉大学医学部）では、日本赤十字社千葉支部の依頼により救護班を組織し亀戸方面に出向き、9月2日の午前には亀戸第一小学校内に救護所



写真2 震災直後の千葉駅（個人蔵）



写真3 明治27年頃の千葉駅（『千葉街案内』52頁）

を開設し治療に当たっており、のちに感謝状が贈られています（10月25日付新聞記事）。

千葉駅の駅舎（現在の東千葉駅にあった駅舎）は、地震により屋根瓦が崩落したようです。写真2を見ると、屋根の骨組みがあらわになり、瓦らしきものが小分けにされて屋根に上げられていることがわかります。

復興と義捐金

千葉尋常高等小学校第四部（現登戸小、当時は現在の千葉県農業会館の場所にあった）は、水田を埋め立てた場所に建てられていたため地盤が弱く、地震により校舎は約2m陥没し崩壊、昇降口だけが残ったそうです。このことは9月16日の協議会でも報告され、他の学校の被害状況とともに今後の対応について議論されました。その後、10月23日・30日・11月17日の市議会でも小学校第四部の移転や建設費などの議論がなされ、大正13年（1924）1月25日の市議会では移転先の敷地が決定したと報告されました。東京や神奈川の被害より小さかったと思われる千葉市の被害ですが、10月5日付の新聞では、学校や道路・橋梁などの被害を見積もると7万円位になると報じています。

表1 各府県の被害状況一覧

府県	住家被害棟数							死者数（行方不明を含む）				
	全潰	(内非焼失)	半潰	(内非焼失)	焼失	流失埋没	合計	住家全潰	火災	流失埋没	工場等被害	合計
東京府	24,469	(11,842)	29,525	(17,231)	176,505	2	205,580	3,546	66,521	6	314	70,387
神奈川県	63,577	(46,621)	54,035	(43,047)	35,412	497	125,577	5,795	25,201	836	1,006	32,838
千葉県	13,767	(13,444)	6,093	(6,030)	431	71	19,976	1,255	59	0	32	1,346
静岡県	2,383	(2,309)	6,370	(6,214)	5	731	9,259	150	0	171	123	444
埼玉県	4,759	(4,759)	4,086	(4,086)	0	0	8,845	315	0	0	28	343
山梨県	577	(577)	2,225	(2,255)	0	0	2,802	20	0	0	2	22
茨城県	141	(141)	342	(342)	0	0	483	5	0	0	0	5
長野県	13	(13)	75	(75)	0	0	88	0	0	0	0	0
群馬県	24	(24)	21	(21)	0	0	45	0	0	0	0	0
栃木県	3	(3)	1	(1)	0	0	4	0	0	0	0	0
合計	109,713	(79,733)	102,773	(79,272)	212,353	1,301	372,659	11,086	91,781	1,013	1,505	105,385

「災害教訓の継承に関する専門調査会報告書」表1-1より

義捐金について、千葉県は「県は被災地として各方面から義捐金を受けているので他府県には贈らない」という方針でした。これに対し千葉市は「市は東京と密接な関係があるので義捐金を贈らないわけにはいかない」との意向を持っており、そのことについて県に確認していました。その後千葉県から、

①義捐金募集の発起人として市から3名出して欲しい。

②義捐金の贈り先は市で相談して決定してよい。
との話があったとして、9月16日の協議会で市長は市会議員に相談していますが、結局は県と足並みを揃え、東京には義捐金を贈らないことになりました。その理由の一つに外国からの寄付が挙げられています。大正14年4月3日発行の『東京大正震災誌』に外国からの義捐金について記述があります。大正13年4月末現在でアメリカ・キューバなど31か国から22,392,284円99銭が寄せられています。また、世界各国の日本人会や赤十字社からも食料品・衣類・建築資材・医療器具・曳船・自動車・トラックなどが寄付されたようです。皇室からは1,000万円が下賜され、閣議により東京・神奈川・千葉・静岡・埼玉・山梨・茨城の罹災者に分配することが決定されました。

千葉県では、10月12日に開催された震災復興の臨時県会に先駆けて、10日に議案審査の県参事会が開催され、復興に要する予算は111万余円と提示されました(10月13日付新聞記事)。また、10月27日付の新聞には県教育会が募集した義捐金の記事もあります。罹災教員・生徒児童の救済のため集まった義捐金は16,600円で、当初学用品を現品給与する計画でしたが、文部省から多数の学用品の提供があったため、県教育会は現金を給与することに決定したと報じられています。千葉市の義捐金募集に関しては、11月4日付の新聞に集まった金額についての記事があります。11月2日までに送金があった金額は県内から180,975円、県外から190,000円で、うち千葉市

内からは3,021円30銭であったと報じられ、予定額の300,000円を超えた金額でした。

このような多額の予算や義捐金により、被災地は徐々に復興していきます。関東大震災から11年後、東京で開催された第15回赤十字国際会議では、被災地の復興状況が報告され、視察も行われました。

関東大震災からちょうど100年。この地震は2～300年に一度の巨大地震とも言われていますが、「天災は忘れたころにやってくる」という言葉もあります。この100年の節目に、改めて地震災害の恐ろしさを再確認するとともに、ご家族なども災害に遭遇したらどのような行動をとるか、話し合うことも大切なのではないのでしょうか。

【参考文献】

- 『東京大正震災誌』(大正14年4月3日 東京市役所)
『千葉縣千葉郡誌』(大正15年2月11日 千葉郡教育会)
『大正震災志』上・下(大正15年2月28日 内務省社会局)
『大正大震災の回顧と其の復興』下巻(昭和8年8月1日 千葉県罹災救護会)
『千葉市史』第二巻 近世近代編(昭和49年3月31日 千葉市)
『千葉市教育史』通史編 上巻(平成12年2月16日 千葉市教育委員会)
『千葉市議会史』記述編1(平成17年3月 千葉市議会)
『千葉県の歴史』通史編 近現代2(平成18年3月27日 千葉県)
『千葉市史編さん便り』No.8(平成24年3月、千葉市史編さん担当)
『日本歴史災害辞典』(平成24年6月10日 吉川弘文館)
図録『関東大震災と復興の時代』(平成24年9月1日 台東区立下町風俗資料館)
「災害教訓の継承に関する専門調査会報告書」(平成18年7月 総務省 HP https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1923_kanto_daishinsai/index.html 2023年9月1日現在)
特別企画「関東大震災100年温故備震～ふるきをたずね明日に備える～」(日本赤十字社 HP <https://www.jrc.or.jp/webmuseum/column/kantou-100th/> 2023年9月1日現在)



2023 年度後期 千葉市史主催 講座のご案内

◇中級古文書講座「江戸時代の村の古文書を読む」◇

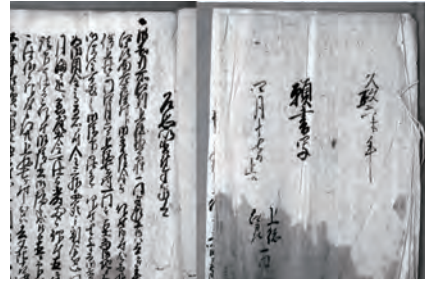
くずし字に慣れ、古文書がある程度読める方を対象とした講座です。全6回。
千葉市内に残された古文書のコピーをテキストとして、くずし字の読解、史料が書かれた背景の解説などを行います。

定員 24名 会場 千葉市立郷土博物館講座室
対象 一般（古文書がある程度読める方）

日程 2023/11/14(火)・21(火)・12/12(火)・19(火)
2024/1/16(火)・23(火)

募集 市政だより（10月号）にて募集、10/11(水)必着。

講師 後藤 雅知先生（立教大学文学部教授）



*写真は昨年度テキストの一部（小山町有文書）

申込み方法

往復はがきまたは電子申請でお申込みください。

往復はがきの場合は 住所・氏名(ふりがな)・年齢・電話番号、講座名 を明記のうえ、
下記 市史編さん担当 までお送りください。はがきの場合、一枚につきお一人のご応募です。

電子申請の方法ほか詳細は市政だより・千葉市立郷土博物館 HPにてご確認ください。

※お申込み多数の場合、抽選となります。予めご了承ください。

千葉市立郷土博物館

検索

CLICK!

問い合わせ先

千葉市立郷土博物館 市史編さん担当
Tel 043-222-8231

既刊紹介

千葉市歴史読本『史料で学ぶ 千葉市の今むかし』

令和3年に市制100周年の節目を迎えた千葉市の歴史について、原始・古代から近現代までの歩みを1冊にまとめました。千葉市の通史を概観できるだけでなく、数々の貴重な史料から郷土の歴史を学ぶことができます。

市域における歴史上重要なトピックをテーマ項目として取り上げ、それぞれ図版を多く用いて、わかりやすく解説しています。全体は時代ごとの4章構成。ご興味のある部分のどこからでもお読みいただけます。

B5判・オールカラー、220ページ 令和4（2022）年3月刊行
千葉市立郷土博物館・市政情報室にて販売中 価格1,000円（税込）



お宅にのこるその資料、
捨てないで！！



古い書付や写真、民具類など、台風などの自然災害やそのほかの事情により濡れてしまったり、汚れてしまった資料がありましたら、その対応のお手伝いできればと思います。これらを捨ててしまう前に、可能であれば、**市史編さん担当**までご一報ください。お宅に残る歴史や思い出を、少しでもよい形で後世に残していけるよう、できる限りのお手伝いをさせていただきます。

ちば市史編さんだより31号をお届けします。記事にあるとおり、今年は関東大震災が起きてから100年ということで、今夏は各種メディアでも大きく取り上げられていました。南海トラフ地震についても近年懸念されているところであり、また地震だけでなく、地球規模の気候変動による大雨や台風の被害も年々増えています。自然災害に対する備えは、いつであっても重要であることは言うまでもありません。歴史学の使命のひとつが未来への備えであるならば、過去の災害を学ぶことで得られる教訓は大きいものでしょう。本号の記事が、改めて災害への備えを考えるきっかけになれば幸いです。（え）

あ と が き

ちば市史編さん便り 31号 Chiba-shishi News Letter No.31

発行日 2023年9月28日
編集・発行 千葉市立郷土博物館 市史編さん担当
〒260-0856 千葉市中央区亥鼻1-6-1
印刷 株式会社みつわ